

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

Ⓖ 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 Ⓖ メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a104-06] 競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／国際競技力の向上を通じた豊かな社会の実現

コーディネーター: 出雲 輝彦(東京成徳大学)、田原 陽介(青山学院大学)

2000年に策定された「スポーツ振興基本計画」により、日本の国際競技力向上は正式に「国策」として位置づけられ、今日まで数々の関連施策が展開されてきた。その結果、オリンピック等での日本のメダル獲得状況は改善し、それらを指標とした日本の国際競技力は相対的に向上している。しかし、国際競技力向上の目的は、単にオリンピック等でのメダル獲得数を増やすことにとどまるものではない。すなわち、そのプロセスと結果等を通じて、スポーツ分野のみならず国家・社会の発展や人々のウェルビーイング（幸福や健康）の促進に寄与するなど、より大きな意義を持つものでなければならない。

日本を含め競技スポーツに力を入れている国は、メダル獲得状況を国際競技力の評価指標とし、それを基に向上施策の成果を判断している。そして、国際競技力向上の意義や社会への効果については、日本の場合、「夢」「希望」「活力」「国際理解」「プレゼンス」などの漠然としたものであり、具体的な根拠や示唆を得られる議論はほとんど行われていない。そこで、本シンポジウムでは、国際競技力向上の意義や目的を深く掘り下げ、それが豊かな社会の実現にどのようにつながるかを議論する。これにより今後の国際競技力向上策の在り方について、その方向性などを見出すことを目指す。

[競技スポーツ-SB-1]

国際競技力向上を通じた社会への還元

ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ

*久木留 毅¹ (1. 独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター国立スポーツ科学センター)

[競技スポーツ-SB-2]

豊かな社会の実現に向けたトップアスリート養成の社会的意義

「活用」の観点から

*菊 幸一¹ (1. 国土館大学大学院)

[競技スポーツ-SB-3]

日本陸連ダイヤモンドアスリート制度にみる競技力と国際的素養を備えた次世代育成

*室伏 由佳¹ (1. 順天堂大学スポーツ健康科学部／大学院スポーツ健康科学研究科)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a104-06] 競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／国際競技力の向上を通じた豊かな社会の実現

コーディネーター: 出雲 輝彦(東京成徳大学)、田原 陽介(青山学院大学)

[競技スポーツ-SB-1] 国際競技力向上を通じた社会への還元

ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ

*久木留 毅¹ (1. 独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター国立スポーツ科学センター)

<演者略歴>

筑波大学大学院体育研究科修了。法政大学大学院政策科学専攻修了。スポーツ庁参与、日本パラリンピック委員会（JPC）運営委員会委員・特別強化委員会委員、英国ラフバラ大学客員研究員、国際スポーツ強化拠点連合（ASPC）アジア大陸理事、世界レスリング連合（UWW）テクニカル委員会委員・科学委員会委員、日本オリンピック委員会（JOC）情報戦略部門部門長、日本レスリング協会ナショナルコーチ兼テクニカルディレクター、専修大学教授などを歴任。

ハイパフォーマンススポーツセンター（HPSC）は、国立スポーツ科学センター（JISS）、HP戦略部、連携・協働推進部、国際情報戦略部、運営部等で構成されている。これらの部門は、日本オリンピック委員会、日本パラリンピック委員会などと連携・協力し国際競技力向上のための事業を展開している。HPSCの事業目的は、国際競技力向上である。スポーツ医・科学、情報面からの支援、アスリートの発掘・育成への関与、地域や大学との連携・協力、国際的なネットワークの構築と人的交流など様々な事業展開を行っている。また、JISSにおいては「JISSプラン2034」を作成し、知見の共有や人材育成なども視野に入れ外部への情報共有を図っている。さらに、HPSCは組織内外の情報についても広く展開する試みを実施している。具体的には、パッケージの地域への展開やフォーラム、カンファレンス、大学との連携講義の設定など、ハイパフォーマンス領域で得た知見を加工してライフパフォーマンスの向上を考慮した取り組みを始めている。さらに、2025年大阪・関西万博では、国連と連携しスポーツを通じた開発と平和へのフォーラムやオーストラリアパビリオンでの東京2020大会のレガシーでの発信も行なっている。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 皿 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a104-06] 競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／国際競技力の向上を通じた豊かな社会の実現

コーディネーター:出雲 輝彦(東京成徳大学)、田原 陽介(青山学院大学)

[競技スポーツ-SB-2] 豊かな社会の実現に向けたトップアスリート養成の社会的意義

「活用」の観点から

*菊 幸一¹ (1. 国土館大学大学院)

<演者略歴>

体育・スポーツ社会学を専攻。九州大学、奈良女子大学、筑波大学を経て、現在国土館大学大学院特任教授。教育学博士（筑波大学）。日本スポーツ体育健康科学学術連合代表、前日本体育・スポーツ・健康学会会長、前日本スポーツ社会学会会長（現在顧問）、前文部科学省学習指導要領作成協力者（高校保健体育、座長）など。

国際競技力向上をめざすトップアスリート養成は、これまで<発掘→育成→強化>という時間軸でそのパスウェイが想定され、ひたすらメダル獲得に向けた施策や事業が展開されてきた。しかし、今日の国際的なスポーツビッグイベントにおけるゲームは、スポーツそれ自体のゲームと並行して、あるいはそれ以上に国際政治における政治的ゲームやグローバル経済における経済的ゲームのアリーナ（場）と化している。トップアスリートのパフォーマンスは否応なくこの2つのゲームに巻き込まれる身体性を有しているのだ。多額の税金や経済資本を投入して養成されたトップアスリートは、これら2つのゲームの手段や消費・消耗的な存在であってはならないだろう。これから求められる豊かな社会が、これまでの消耗・消費を最善とする産業型社会とは異なり、成熟型社会の循環・共生的ライフスタイルによって実現されるとすれば、トップアスリート養成の社会的意義はどのように変化せざるを得ないのであろうか。本報告では、文明（テクノロジー）と自然（エコロジー）の最前線（フロンティア）に身を置くトップアスリートだからこそ実現可能な両者の融和への示唆やその危機に対する予知的可能性といった、ポスト「強化」における「活用」の観点から新たな社会的意義について論じる。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

■ 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 ■ メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a104-06] 競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／国際競技力の向上を通じた豊かな社会の実現

コーディネーター: 出雲 輝彦(東京成徳大学)、田原 陽介(青山学院大学)

[競技スポーツ-SB-3] 日本陸連ダイヤモンドアスリート制度にみる競技力と国際的素養を備えた次世代育成

*室伏 由佳¹ (1. 順天堂大学スポーツ健康科学部／大学院スポーツ健康科学研究科)

<演者略歴>

- ・2004年 アテネオリンピック 陸上競技女子ハンマー投 出場
- ・2019年 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 博士後期課程 修了 (スポーツ健康科学博士)
- ・日本陸上競技連盟 理事、強化委員会ダイヤモンドアスリート プログラムマネージャー

日本陸上競技連盟は2014年より、競技者育成指針と連動した強化育成パスウェイの一環として、競技力と共に人間性・国際性を備えた人材を育成する「ダイヤモンドアスリート (DA) 制度」を展開し、修了生の約3割が国際大会に出場、金メダル獲得者も輩出している。本制度では、専門家を招聘して行う語学 (英語)・栄養・心理・リーガル・メディア対応・金融リテラシー等の研修や、海外での競技活動を通じて、国際的な舞台で活躍する際に求められる素養を備えると共に、競技引退後にもスポーツ界や国内外の社会で活躍できる次世代人材の育成も目指している。第8期には、他競技団体へのヒアリングを通じて得た多面的育成の成功例を分析した。一方、陸上競技は専門化の遅さや進学時の環境変化の特性を踏まえ、高校生から大学2年生までを対象とする従来の選考方針を維持しつつ、他競技の知見を制度の強化に活かした。第11期生では、プレッシャーへの配慮としてDAの前段階に「Nextage」を設け、また主体性を重視した自薦制の導入等、選考・支援体制の改革を進めている。本発表では統括団体の立場から、「豊かな社会の実現」に貢献するアスリート像の構築に向けた育成の在り方を共有する。